はじめに

本書は、ここ三十年ほどのあいだに書きためた美術批評を中心とする文章の集成である。それも日本という舞台に視点を据えたものばかりで、外国の芸術家や作品に言及することがあっても、すべて日本という文脈において引かれているにすぎない。理論的なものから時事的なものまで様々だが、全体としてひとつの「物語」として読めるように構成すべく努めたつもりである。

全五章に分かれるが、あらかじめ各章の内容を簡単に説明しておこう。

第一章「前衛の透層」は、序文の役割を果たす「批評という物語」を始めとして、瀧口修造、宮川淳、荒川修作、中西夏之、加納光於、そして草間彌生といった、戦後の日本を代表すると言っていい批評家、美術家に関する文章を収める。「前衛」という言葉にややためらいもあったが、それぞれまぎれもない存在感を示す批評家、美術家という意味で、あえて使用することにした。「透層」という特異な言葉は、加納光於によるものである。この言葉の意味については、私の論考、あるいは氏との対談に明らかだが、戦後日本の芸術状況をも暗示しうる卓抜な比喩的表現として用いさせていただいた。

第二章のタイトル「表層の冒険」は、長く私が愛好してきた表現だが、いわゆる抽象絵画を主題にして、私の目に触れえたかぎりでの画家たちの作品について論じた文章をここに収める。「表層の冒険」という意味も、また本書を「芸術表層論」と題した理由も、ここでおのずから明らかとなるだろう。理想と現実のはざまで、日本の抽象絵画がどんな多様性と展開可能性を示してきたか、少なくともその一端が窺われ

るはずだ。

第三章「現代美術のトポグラフィー」は、抽象絵画の限定を離れて、日本の現代美術がどんな多様な相貌を見せるか、彫刻と絵画を中心に広く概観する。広く、時事的に、状況的に、とは言っても、やはり私なりの視点からする「表層論」である、でしかありえないだろう。

第四章「〈版〉のコスモロジー」は、「表層」の概念と対をなす、あるいは不即不離の関係にあると言ってもいい、〈版〉の概念について、様々な機会に論じた文章を収める。もとより版画の問題が中心だが、しかしここには岡崎和郎のような戦後日本を代表するオブジェ作家も、あるいは西尾康之のようなまことに稀有な「彫刻家」も含まれる。〈版〉の概念の豊穣にしてプロブレマティックな可能性が垣間見えれば幸いである。

第五章「肉体と眼差し」は、なんらかの意味で人間の肉体を眼差(まなざ)す作家と作品について言及した文章を収める。写真家荒木経維との「討議」も含まれるが、広く写真、動画、舞踊、舞踏などについて触れられるだろう。三島由紀夫、美輪明宏、そして最後に金子國義についても言及される。

と、私の「批評という物語」をこんなふうに構成してみたが、もとより読者はこれをどこからでも、どのようにでもお読みいただいてかまわない。「物語」の批判、解体も、また新たな「批評という物語」の生成を促すはずのものだからである。

芸術表層論——批評という物語　目次

はじめに　2

第一章　前衛の透層

批評という物語　物質的想像力のために　12
宮川淳　見ることの厚み　20
荒川修作あるいは「虚構の場所」　23
瀧口修造あるいは版の精神　26
瀧口修造とアンティエ・グメルス　影像の化学　34
加納光於　色彩の〈揺らぎ〉とともに　37
加納光於　言葉と作品　48
色彩の宇宙、眼差しの海　加納光於＋谷川渥　61
中西夏之　佇みの装置　90
草間彌生　私記　99
幸福の五色のオブジェ　草間彌生のリモージュ焼き　104
「増殖の幻魔」とクサマ・ハプニング　106

草間彌生の言語宇宙　110

第二章　表層の冒険

表層の冒険　抽象のアポカリプス　116
松本陽子　生成の絵画　126
松谷武判　黒と白の戦略　128
山田正亮　自己展開する絵画　130
辰野登恵子　矩形の聖域　132
真鍋淳朗　壁の思想　134
中村功　重層化された時間　136
内海信彦　黒色の想像力　138
堀浩哉　「日本絵画」のために　140
中村一美　「偉大な絵画」のために　142
館勝生　内界の形象　147
根岸芳郎の位置　網膜的絵画の可能性　149
丸田恭子　意味の統体　153
丸田恭子の世界　155
楠本正明　明るさとゆらぎ　159
中上清　屹立するマニエラ　161

山田宴三　表層の冒険のために　163
小川佳夫　可能性の闇　166
坂井真理子あるいは無垢性の絵画　168
櫻井美智子　生成の絵画のために　174
羽賀洋子　色彩の植物相（フローラ）　177
山田ちさと　支持体をめぐる冒険　179
石井博康　抽象と指向対象　183
芝章文の変化について　185
アーティストかアルティザンか　芝章文のマニエリスム・バロック　189
小澤基弘　関係性の絵画　193

第三章　現代美術のトポグラフィー

現代美術のトポグラフィー　200
スキン・スケープ　214
奥山民枝　山＝胎児の官能性　222
遠藤利克　円環―加速する空洞　224
後藤寿之　「彫刻」をめぐる問い　227
高木修あるいはストイシズムについて　232
市川和英　鋼板の風景　234

山田恵子　鉄の詩学　236
多田正美　音の発生学　242
伊藤福紫　闇の理法　247
勝又豊子　「触視的」な場の創出のために　250
三輪美奈子・日比野ルミ　皮膚論的な想像力のために　253
中山正樹　特殊相と普通相　258
吉江庄蔵　「皮膜彫刻」の問題性　261
彫刻の表層　264
稲垣考二　鏡と皮膚　278
小野隆生の「影」について　281
藤山ハン　質料性の強度　285
志水堅二　かたちとかたちならざるもの　290
塩崎敬子　薔薇の想像力　293
内田あぐり　「わたしの素描のすべて」展　内田あぐり＋谷川渥　298
池垣タダヒコ　ドローイングとはなにか　315

第四章　〈版〉のコスモロジー

時代の「病芯」・負の強度　320
絵画か版画か　326

北京から東京へ、そして……　332
棟方志功の板画　338
ジャクソン・ポロックと棟方志功　341
版画　黒の魅惑　346
日和崎尊夫　星と薔薇　352
星野美智子の世界　359
秋山潔の「版」について　362
パランプセスト　あるいは北川健次における面と線　365
渡邊晃一　「うつしとる」と「かたどる」　369
「版」のオブジェ　あるいは岡崎和郎の特異性　375
西尾康之　肉体への眼差しと技法のエロス　382

第五章　肉体と眼差し

皮膚（モード）のエロス学　荒木経惟＋鷲田清一＋谷川渥　392
荒木経惟　「場」が現象する　403
吉行耕平　覗き見の現象学　409
マリオ・A　逆ピグマリオニズムの人形愛　412
内藤忠行　アラベスク考　416
絵画・映画・動画　419

寺山修司とフリークス　427
舞踏の原母のために　433
郡司正勝＋大野慶人　肖像はどう変貌するか　435
画家と舞踏家　437
「春の祭典」讃　439
H・アール・カオス　肉体の知性のために　441
「浄土」楽興の時　447
三島由紀夫と音楽　『志賀寺上人の恋』の舞台化をめぐって　449
美輪明宏　美の逆説　452
金子國義　ホモ・エステティクス　455
おわりに　459
初出一覧　461

金子國義　ホモ・エステティクス

先日、京都にある「紅蝙蝠」を訪れた。金子國義氏がアートプロデュースをして、彼の作品で埋めつくされた画廊のような京料理の店である。氏の訃報後に、仕事の関係でたまたま京都に滞在していた私は、あらためて金子國義という画家の仕事を偲ぶべく、この店を訪ねたわけである。

油彩の大作《来訪者》（一九八二年）、《殉教》（一九九五年）をはじめ、リトグラフの《Drink Me》（二〇〇〇年）などの小品、あるいはブリジット・バルドー他（他というのも、私にはバルドー以外よく認知できなかったからだが）の女優たちの写真が壁を埋めつくしている。絵画や写真のそうした人物たちに取り囲まれた静謐な空間のなかで、私は氏の作品へのアンビヴァレントな思いを反芻していた。

金子國義の作品は、一見して忘れ難い。それほどに独自のスタイルをもって訴えかけるものがある。一九六〇年代後半の《花咲く乙女たち》から、七〇年代以降のアリス群像、バタイユやジュネの小説の挿絵、あるいは八〇年代以降のおびただしい〝男たち〟の群像にいたるまで、そのモティーフ・意匠に違いはあるものの、受ける印象はほとんど変わらない。それは、こういう言い方ができるとすれば、〝金子國義！〟という印象だ。

氏は、風景画も静物画も、要するに人間の登場しない絵はいっさい描かない。人間を描くといっても、それは肖像画でも風俗画でもない。キャロルやバタイユやジュネの小説をモティーフとする場合には、一

定の制約があることは避けられないが、それにしても氏はひたすら自分好みの人間たちを男女を問わず筆の力で画面上に現出させたと言ったほうがいいかもしれない。

そして、あらためて言うまでもなく、氏の現出させる少女たちも成熟した女たちも男たちも、皆プロポーション良く、顔が小さく、くっきりと弧を描く眉と、官能的な唇と、大きな眼をもって、画面のこちらを、あるいはあらぬ方向を見つめながら空虚な表情を浮かべている。まるで内面など存在しないかのように。

澁澤龍彦は、金子國義の部屋を初めて訪れたとき、部屋を埋めつくす作品群を見て、「プリミティブだ。いやバルチュスだ」と呟いたという。そして金子自身は、一九八四年に京都で開かれた、わが国最初の大規模なバルチュス展に際しての「バルチュス展を見て」という文章のなかで、こんなふうに書いている。

バルチュスは他人を観察することに最大の関心を持っているのではないだろうか。なかでも眠っている人のような無防備で、一種の放心状態にある人、あるいは無心でなにかやっている人を、彼は好んで描いている。この覗き見るという視点には、僕もとても共感できる。

バルチュスへの「共感」を熱く語りながら、しかしこれはほとんど金子自身の心情の吐露とも受け取れる文章ではあるまいか。そしてこれは、私の推測するに、澁澤龍彦が一九六七年に書いた「花咲く乙女たちのスキャンダル 金子國義について」のなかの、「私が興味をいだくのは、おのれの城に閉じこもり、小さな壁の穴から、自分だけの光り輝く現実を眺めている、徹底的に反時代的な画家だけである」という一

文に密かに呼応するものとは言えないだろうか。

とはいえ、これらの文章には若干の留保というか解釈が必要だろう。バルチュスについての金子國義の文章において、「他人を観察することに最大の関心を持っている」という一節を氏自身にあてはめるとすれば、氏においてまず「他人」とはなにかが問題となるだろう。たしかに人間にしか興味がない。それも自分好みの人間ばかり。愛らしい《Drink Me》のアリスの姿を感心して眺めていた私は、横に広いそのアリスの額(ひたい)が氏自身の額にそっくりなことに突然気づいた。そうか、これは氏自身の理想化されたひとつの姿なのだなと感じたものである。いや、アリスばかりではない。氏の描く人間たちは、少女も娼婦も男たちもすべて氏自身のありうべき理想化された姿にほかならないのではあるまいか。金子國義にとって、「他人を観察する」とは、自分自身の存在可能性の極大化のための方途なのではないか。だから、「小さな壁の穴から」覗き見られた「自分だけの光り輝く現実」とは、理想化された自分自身にほかならぬ美しい「他人」たちの集う世界以外のものではあるまい。

金子國義の作品には、バルチュスのみならず、ときにマグリットも、あるいはベルメールすら影を落としているように思われる。だが、人物の姿形、人物の配置におけるそうした類似性よりも、氏の作品の際立った特徴は、背景が、より正確には遠景が存在しないことだろうと思う。人物たちは、部屋の壁かカーテンかを背にするか、あるいはバロック絵画さながらに闇に浮かび、あるいは明るいモノクロームの平面の前に立つ。人物たちの向こう側を見通すことはできない。眼差(まなざ)すべき世界が向こう側には存在しない。問題はこちら側だけなのだ。狭い舞台上で観客に向かって演技する俳優たちのように、氏の画面上の人物たちは存在する。そして観客とは、誰よりも金子國義自身のことである。

遺著となった『美貌帖』（二〇一五年）を読むと、氏の資質のようなものがよくわかる。「序 部屋の中」は、とりわけおもしろい。氏の部屋のなかにある小物たち、買い集めたコレクションを片っぱしから列挙していく章なのだが、清少納言の『枕草子』さながら、ひたすら好き嫌いを、いや好きなものだけをあげつらっていくのである。好きなものだけに取り囲まれた氏は、徹頭徹尾、一個の享受者である。美的享受に浸る人、唯美主義者（エステート）というほかはない。

そのエステートが、享受の側から制作の側にまわる。それも、また自分好みの人物たちを画面上に現出させ、みずから享受するためにほかならない。制作がとりもなおさず享受なのだ。この稀代の美的人間（ホモ・エステティクス）には、しかし自分を忘れて眼差すべき彼方というものは存在しないのだろうか。

画家に対する私のアンビヴァレントな思いも、そんな疑問に関係していると言っていいかもしれない。が、その氏も、ついに不可視の向こう側へ、彼方へと旅立ってしまった。そこもまた美しい「他人」たちの集う世界だろうか。御冥福を祈る。

『ユリイカ 金子國義の世界』臨時増刊号、二〇一六年七月

谷川渥（たにがわ・あつし）
美学者。東京大学大学院博士課程修了。文学博士。現在、京都精華大学客員教授。
主な著書『形象と時間』（白水社、1986／講談社学術文庫、1998）、『記号の劇場』（編著、昭和堂、1988）、『バロックの本箱』（北宋社、1991）、『美学の逆説』（勁草書房、1993／ちくま学芸文庫、2003）、『鏡と皮膚』（ポーラ文化研究所、1994／ちくま学芸文庫、2001）、『新編　表象の迷宮』（ありな書房、1995）、『見ることの逸楽』（白水社、1995）、『文学の皮膚』（白水社、1996）、『幻想の地誌学』（トレヴィル、1996／ちくま学芸文庫、2000）、『図説・だまし絵』（河出書房新社、1999）、『イコノクリティック』（北宋社、2000）、『絵画の教科書』（監修、日本文教出版、2001）、『廃墟の美学』（集英社新書、2003）、『美のバロキスム—芸術学講義』（武蔵野美術大学出版局、2006）、『絵画の制作学』（共編著、日本文教出版、2007）、『シュルレアリスムのアメリカ』（みすず書房、2009）、『肉体の迷宮』（東京書籍、2009／ちくま学芸文庫、2013）、『新編　芸術をめぐる言葉』（美術出版社、2012）、『書物のエロティックス』（右文書院、2014）、『幻想の花園』（東京書籍、2015）など。

芸術表層論——批評という物語

2017年11月10日　初版第1刷印刷
2017年11月20日　初版第1刷発行

著　者　谷川　渥
発行人　森下紀夫
発行所　論 創 社
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23　北井ビル2F
TEL：03-3264-5254　FAX：03-3264-5232　振替口座　00160-1-155266
装幀／宗利淳一
印刷・製本／中央精版印刷
組版／フレックスアート
ISBN978-4-8460-1645-6
© Atsushi Tanigawa, printed in Japan
落丁・乱丁本はお取り替えいたします。